

ことばから引く日本の女性の「今」辞典 作成の提案

高 崎 みどり

1 はじめに

筆者は、本年度蓼科ワークショップにおいて、「“新・差別語辞典（女性篇）”の提案」という題で発表を行った。発表後の質疑応答やその後の個人的ディスカッション等々において、種々の意見・提案・批判をいただいた。そして、この“辞典”を作ってみようという試みに少なからぬ方々から参加の申し出があり、色々なアイデアもいただいた。

本稿ではそれらを整理して、改めて日本の現代社会における、ことばと女性についての現状を一覧できるような辞典の構想として示し、更に多くの方々の批判をおおぎたいと思う。

2 “辞典”の構想のきっかけ

筆者の勤務校ではじめて行った「女性学」の講義で、当初学生（女性・男性が8対2ほどの比率で200人ほど）の側にあったとまどいや拒絶感が、実際の作業を通じて消えてゆき、見慣れた日常の見方が少し変わったという感想をレポートに記す者が多かった。

日常、見慣れたもの（新聞・雑誌・CM・国語辞典・映画・小説……）について、女性の扱われ方という一点で改めて見直してみると、この社会での女性の位置が浮かび上がってくる。一つ一つバラバラなままでは、「これは広告だから特別」「本人がいいんだったらそれでいいではないか」「そんなつまらないこと」で片付けられるゴミの山にすぎない。しかし、量を集め、網羅的な分類の枠に入れ込んでゆくと、一目瞭然になってくるのである。理論や学説よりも、学生達は自分達が集めた材料の質・量に何よりも説得される。

それでは、はじめからそうした日本社会での女性の扱われ方を一覧できるようにならないものか。あるいは、せめてこれはどのような扱われ方にあたるのか（性別役割固定・女性を劣った存在として扱う……）といった分析の枠組みだけでも提供できないものか、というように考えついた。もちろん我々の専攻領域からいって、“ことばの面から”という制約はあるが、ここ数年のフェミニズム言語学の蓄積や学問分野としての社会言語学の興隆は目ざましいものがあり、それらの成果を資源とすることは充分可能と言えるだろう。

「ことばと女性」について、何がどんなふうに調査され、研究報告されているのかを、一定のコンセプトのもとに整理・配列したものが望ましい。単なる文献解題風、学会展望風ではなく、また講座ものの分担執筆形態ほど詳しくなくてよいが、抄録・要約だけでなくその意味づけの記述も合わせてなされていることが望ましい — と、まあ簡単ではない。それでも、アンチ・フェミニストにも考えてもらう材料を提供し、社会言語学者にも納得できるような客観性を心がけ、また諸外国の研究者にも日本の社会の一つの現状として知ってもらえるような形に整える努力はしなければならないだろう。

3 どのような内容が考えられるか。

「ことばから引く」ということで、あくまでも言語現象から切り込んでゆく、という方法をとりたい。まず大きくはその言語現象のサイズや種類で分け、更にその言語現象の意味するところなどで細分することになるだろう。

また、単に女性をはっきりと差別しているような言語現象や、そうした分析をする研究ばかりでなく、ある言語現象について性差という観点から見ている研究や調査をも紹介したい。そればかりでなく、好ましいとして扱われている言語現象（好感を持たれる女性の話し方・女性の手紙の書き方……）についても、とりあげてその意味を考えることが必要であろう。

これが悪い、そのことばは無くすべきだ、といった単純な記述のしかたでは、“差別用語言い換え集”のように扱われてしまうだろう。そうならない

ために「辞典」と名付けて、網羅的というばかりでなく、中立的な記述態度や内容をも心がける必要がある。

具体的な構成としては次のような枠組みでどうであろうか。

I 媒体レベル

1. 音声 —— ピッチの性差・ピッチの意味など
2. 文字 —— 字種・女への漢字など

II 語句レベル

1. 女性に対する語句 —— 呼び方・名前など
2. 女性の使う、または使う頻度が高いとされてきた語句 —— 女房詞・遊女語・敬語・終助詞など

III 文章・談話レベル

1. 女性の話し方の特徴
2. 女性の書き方の特徴
3. 女性の描かれ方 —— 歌詞・広告・小説・教科書・国語辞典など

IV 言語生活レベル

1. マスメディアと女性
2. 女性向けの手紙の作法指南
3. 女性向けの読み物の表現
4. 言語生活と性差
5. 女性語の諸相 —— 世代差・職業差・職階差・場面差など

これらの項目では未だ網羅的とは言えないし、項目どうしのレベルも同一水準に揃っているとは言えない。具体的な材料が集まっていくうちに作り変えてゆきたい。どうもサイズが大きくなると、それに含まれるべき内容も多岐にわたるような傾向がありそうだ。そのことは、とりもなおさず、「女性とことば」というテーマを扱うためには、最近の言語学のいくつかの流れ、すなわち語用論や談話文法や社会言語学、エスノメソドロジー等を方法的にも取り込む必要のあることを示唆しているように感じられる。

4 一例として

あくまでも試みにすぎないが、I～IVのレベルの例を以下に一例ずつ挙げてみることにする。

なお、「引用文献」は、実在のものであるが、以下に示したように各項目の終わりにいちいち置く方が便利ではないかと思う。また、言語学・国語学を専門とする人以外の人でも必要に応じて原著書・論文にあたるように、簡単なガイドを巻末に付すと良いかと思う。

I 媒体レベルの例

音 声

〔ピッチ〕

ピッチの意味

大原（1993 a）によれば、日本語を第一言語とする女性の話し手は、日本語を話す時は英語を話す時に比べて、非常に高い声を使用するという。その理由としては、「女性は女性らしく」という日本語文化による抑制があげられる、とする。

また、大原（1993 b）は、実際に行った実験結果に基づき、声の高さの社会的意味について分析を施している。それによると、声のピッチが高いほど、その声の持ち主は聞き手によって「女らしい」と思われる職業（例：幼稚園の先生、受付、秘書……）に向いていて、「三高（学齢・身長・収入、ともに高い）」の男性と結婚する確率が高く、また、婚期が遅くなる確率が低く、そして年齢は若く思われる傾向にある、という結果を出している。

<引用文献>

- 大原 由美子（1993 a）—「『女ことば』のピッチ — 日英語の比較」「日本語学」5月臨時増刊号 Vol.12 明治書院
- 大原 由美子（1993 b）—「声の高さから受ける印象について」「ことば」14号 現代日本語研究会

II 語句レベルの例

女性に対する語句

〔呼び方〕

妻（つま）

「家内」「奥さん」と比べて、この語自体には、「夫（おっと）」と同様に、中立的な位置づけが与えられているようだ。しかし、実際にその語句の扱われ方を見ると、中立的とは言いきれず、「妻」という存在の、社会的な位置を反映しているように思われる場合がある。

高崎（1985）によれば、国語辞典の中での「妻」という語の扱われ方は差別を反映したものとなっている、という。5種類の国語辞典の中の用例中、「妻」という語の出てくるものをあげると以下ようになる。なお、以下のA～Eは、それぞれ異なる国語辞典であることを示す。また、カッコ内の語の語釈に添えられた用例に「妻」が出てくる、ということである。

- A. 妻子を養う （養う）
- B. 妻子を抱える （抱える）
- C. 妻子という羈絆 （羈絆）
- C. 妻もあれば子もある （ば）
- D. 妻子を携えて赴任する （携える）
- E. 妻を帯同する （帯同）
- A. 暮らしの事は全部妻に任せてある （暮らし）
- B. 夫に従順な妻 （従順）
- B. 妻子を置いて出家する （出家）
- D. 妻子を捨てて逃げる （逃げる）

上記の用例は、「養う」「抱える」といった語の用例であるから、「借金を抱える」でもよいし、「くらしにひびく値上げ」でもよい、別に「妻」を持ち出さなくてもすむものだ、という。少なくともこれらを

見るかぎり、「妻」とは多くの場合、子どもとワンセットになった存在、それもまつわりつく従属的な存在である、といった認識が浮かび上がってくる、としている。

<引用文献>

- 高崎 みどり (1985) — 「妻」 『国語辞典にみる女性差別』 ことばと女を考える会 三一書房

Ⅲ 文章・談話レベルの例

女性の描かれ方

〔歌 詞〕

寿岳 (1979) は、学生とともに日本で大衆的に歌われる歌の歌詞の中で、女性がいかに描かれているかを調査した。その結果、歌詞の中の女性の行動としては「側に居る・泣く・惚れる・真心をつくす・愚痴を言わない」等の、男にくっついてしかも一歩退いた位置を取りたがるものであること。主体性を喪失していて「待つ・甘える・愛される」という形の恋をしていること。姿態としては「長い髪・かわいい・やさしい」といった姿。そして「つくしたい・捧げたい」という願いを持ち、「弱い女・ダメよ・女なんだもの・女は女・バカな女・女ですものだめよだめだめ」と自らにレッテルを貼っていること。等々を明らかにした。そして、「歌謡曲、演歌、フォーク、すべてすべて同一パターンの繰り返し、そしてそれはあまりにも貧困な片寄った女性像しかなかった。」としている。

<引用文献>

- 寿岳 章子 (1979) — 『日本語と女』 岩波新書99

IV 言語生活レベルの例

マスメディアと女性

〔新聞〕

メディアの中の性差別を考える会（1991）は、新聞を対象として、紙面に描かれる女性像の実態調査をした。それらを性差別表現の分類チャートを使って分類し、分析を加え、新聞における女性の扱われ方の全体像を見渡せるようにしている。この分類チャートは大きく三分され、

A. 差異の強調 —— 不必要に男女の差異を強調するもの。

例：「女子社員」など職業の上に「女・女性・女子・女流」などの“女性冠詞”を付す。また、「女性初の〇〇」という扱い、その他。

B. 「女らしさ」の押しつけ —— 「女であること」の強調。

例：アイキャッチャーとしての女性写真等、女性を性的対象とする扱い、その他。

C. 性別による社会的役割分業 —— 女性に、社会では男性の下位にあって、男性の補佐、家庭にあっては家庭の世話をする母・主婦であるという特定の社会的役割をふり当てるもの。

例：女性のインタビューで、結婚は？ 子供は？ 夫の職業は？ 料理は得意？などのおきまりの質問項目が並ぶ、その他。

のようにになっている。そしてA・B・Cそれぞれがまた更に下位の項目に分類される。

この本の初版は1991年であるが、1994年10月現在も、ここで指摘された新聞における女性の扱われ方はほとんど変化がないようだ。一種の記録のための資料として少し例を記しておく。“女性冠詞”と言われるものも「主婦長官・女子高生コンクリートづめ殺し・“鉄の女”美人首相……」と相変わらず多く、死亡記事の男性の「氏」づけ、女性の「さん」づけも不変、「真紀子さん・千秋さん・聖子・二女由利さん」などと、

男性は性、女性は名もよく見られる。また、「女性の気配りを生かしたソフトな警備を（“初めての女性だけの特別機動隊”）」といった記事の扱いや、プール・海辺・朝顔市などでのアイキャッチャー、経済面でのパソコンやニューモデルのテレビや車などの紹介記事における“添えもの”としての無関係な女性の姿を含む写真などなど。

<引用文献>

メディアの性差別を考える会(1991) —『メディアに描かれる女性像』
桂書房

5 おわりに

以上、概要と、いくつかの実例を示した。これだけの中でも反省点は数知れないが、特に感じたのが、性差というファクターで言語現象を分析した研究や、女性とことばを肯定的に捉えた資料などが集まりにくく、性差別的な言語現象の研究ばかりに集中してしまう可能性があることだ。日本の社会の現状を示しているのだ、とも言えようが、「辞典」と銘打つからには、いろいろな方面・観点からの材料を集めなくてはならないのである。自戒として記しておきたい。

(文教大学)